

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫

◆◆◆ No.0469 ◆◆◆

18/02/07

【 2月相場、「大きく動く」可能性もなくはないが…… 】

すでに終了している1月相場は、過去のパターンからも決して少なくない「月初高・月末安」となり、月足は実体部のしっかりした陰線で大引けた。昨年が年間を通して記録に残る小変動にとどまったことからすれば、今年は幸先の良いスタートが切れた、と言えるかも知れない。市場へのいち参加者という立場でいえば、そんな大相場を足もとの2月も是非とも続けて欲しいが、恒例となっている過去の経験則を参考にすると、「その可能性は必ずしも否定出来ない」ようだ。一部については今週初めからすでに兆しがみえている感もあり、今後も荒っぽい価格変動には注意を払いたい。

◎「冬季五輪」開催年は小動き多い、「競技に集中で売買手控え」も!?

2月相場の動静を報じる前に、1月10日付の当レターで指摘した1月相場の特徴を最初にまとめておく。
(1): 「1月に年間の天底」をつける可能性がある
(2): 「1月相場の方向性と年間相場の方向性」は一致することが多い
ちなみに、前者は1990年以降昨年までの28年間で11回、後者は同じ28年間で17勝11敗という結果が残っている。

前述した(2)から先に指摘すれば、いまから年末のことを考えるのは早すぎるほど早いものの、経験則的に今年は陰線引け、少なくとも年初のオープンレベルである112.65円を上回って大引けることは難しいと言えそうだ。また、(1)の経験則を参考すれば、筆者の相場観とは相反するのだが、1月8日に記録したドル高値113.38円がヒョッとすると、今年の高値であった可能性もなくはないだろう……。

さて、ここからは肝心の2月相場の特徴についてレポートするが、まずは勝敗・星取表をみておく。1990年以降昨年まで過去28年は13勝15敗となっており、ほぼ互角の内容。つまり2月相場は、ドル高orドル安のどちらが有利という明確な方向性が見出しにくいことになる。ただ、方向性には特徴のなかった2月相場だが、別の特徴を調べてみると、「動くときには大きく動くが動かない年はまったく動かない」という両極端になりやすい傾向が強うかがえることがわかった。

たとえば、2009年の2月は月間変動9.76円で年間を通してもっとも動いた1ヵ月となっていたほか、2012年の2月も年間でもっとも変動した月。また、2016年も順位的には年間3位に留まったものの、月間の変動幅は10.45円とかなり大きな動きを記録している。それに対し、2014年は逆に「動かない年」であり、月間を通した変動はわずかに2.1円で年間10位の小変動、また昨2017年も月間変動幅は3.36円、同9位に終わるなど、年間を通して動きの鈍い1ヵ月だった。

どちらの道をたどるのかは「神のみぞ知る」ところではあるものの、今年1月は月間の価格変動が5.1円となるなど、なかなかの荒れ相場をたどっただけに、個人的には「大きく動く2月相場」、2ヵ月連続の大変動を是非とも期待している。

しかし、おおむね2月初旬から月末まで1ヵ月近く実施される、4年に一度の「冬季五輪開催年」だけをピックアップして調べてみると、予想以上の小動きにとどまっていることがみてとれる。たとえば、前回ロシアのソチ五輪(2月7-23日)が行われた2014年は前述したように2月の変動幅わずかに2.1円・年間10位の小変動であり、2006年イタリア・トリノ五輪(2月10-26日)の際は3.72円で年間8位、2002年米国ソルトレークシティ五輪(2月8-24日)では3.13円で年間12位、1998年日本の長野五輪(2月7-22日)では6.45円で年間12位一などだった。ヒョッとすると、五輪開催年は、「開催中の競技にクギ付けとなり、取引はおろそか、売買は総じて手控ええられる」ことになりかねないのかも知れない。(了)

当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。
なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

